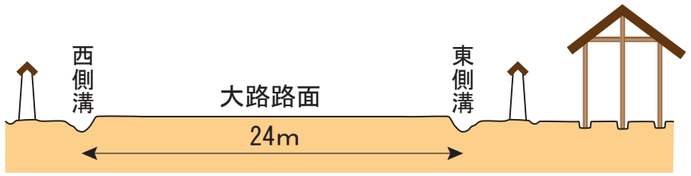
長岡京跡 右京第1241次調査

調査遺跡　長岡京跡右京七条一坊十五町・開田遺跡
調査場所　長岡京市神足２丁目
調査期間　令和３年４月27日～９月中旬（予定）
調査機関　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

大路の側溝と宅地

長岡京は、東西南北に走る条坊によって京域を碁盤の目状に区画した都市遺跡です。東西方向に条路、南北方向に坊路が設定されました。大路の幅は24ｍの規模を持ち、路面の両側には排水用の側溝が設置されました。



第４図　笹井家本洛外図屏風
（『長岡京市史 本文編二』より）

２区土坑４から出土した円面硯（上）と復元品（下）

西国街道について

西国街道が調査地の東側でかぎ型に屈曲することが、江戸時代の絵図からも読み取ることができます。

江戸時代には、近世勝龍寺城（神足館）の出入口が西国街道側に設けられており、調査地周辺は当時の幹線道路に隣接し、盛んな往来があったと考えられます。

西一坊大路東側溝と掘立柱建物（東から）

建物の柱痕が残る柱穴

長岡京跡条坊復元想像図（村上由美子作画）

まとめ

今回の調査では、長岡京の西一坊大路東側溝とその東側の宅地の遺構を検出しました。掘立柱建物３の庇部が近接することから、建物は長岡京造営に関連する施設として先行して建てられ、大路の整備が行われた可能性があります。その後、右京七条一坊十五町の一角を整備する際、建物の庇部分を取り壊し、宅地を囲む築地塀が巡るようになったと考えられます。長岡京廃絶時には掘立柱建物３の近くに土坑が掘られ、多くの土器や瓦が廃棄されたようです。発掘調査によってわずか10年間の長岡京期における土地利用の変遷が追える貴重な資料を得ることができました。

調査地周辺は、西市や役所があった場所と推定されており、近隣での過去の調査では、墨書土器や木簡が出土しています（右京第102次調査）。今回の調査で円面硯が出土したことなどからも、この付近にも公的な施設があった可能性が考えられます。

はじめに

今回の調査地は、延暦三（784）年に桓武天皇によって造営された長岡京と旧石器時代から近世までの複合遺跡である開田遺跡に含まれます。長岡京条坊の復元によると、右京七条一坊十五町にあたり、調査地内には西一坊大路の東側溝が通ると推定されています。周辺には神足遺跡・勝龍寺城跡などの縄文時代から近世にかけての遺跡が所在します。

なお、本発掘調査は、御陵山崎線無電柱化推進補助（街路）業務委託に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施したものです。

調査概要

今回の調査では、西一坊大路東側溝とその東側で掘立柱建物跡、土坑などが見つかりました（第３図）。

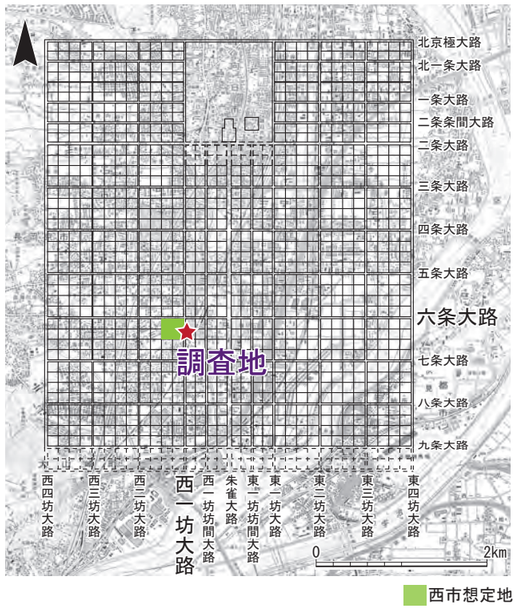
西一坊大路東側溝（溝１）は、総延長 29.4ｍを確認しました。溝の幅は約 1.3ｍ、深さは 0.25ｍを測ります。溝からは、長岡京期の土師器・須恵器・製塩土器・瓦などが出土しました。

溝２は、溝１から約 3.5m 離れた位置に並行して掘られており、総延長 32.5ｍを確認しました。掘立柱建物３の庇の柱穴と重複していますが、溝が後から掘られたことがわかりました。大路と区画するための築地の雨落ち溝の可能性があります。

掘立柱建物３は、大路東側溝から東へ約７ｍ離れたところで見つかった２間 ×５間以上の南北に長い掘立柱建物跡で西側に庇を持ちます。建物の主軸は、ほぼ真北の方位をとります。柱間は梁行 2.1 ～ 2.7ｍ、桁行 2.4 ～ 2.7ｍを測ります（第３図）。

土坑４は、２区の南端に位置し、東西 3.2m 以上、南北約 3.7m 以上、深さ約 0.5m の規模です。使用痕のある円面硯が出土していることから、周辺に文字の書ける人がいたことがわかります。

また、１区南西部で、近世以降のものと思われる石垣５が見つかっています。調査地の東側には、西国街道が通るとされていることから、石垣を含め西国街道関連の遺構と考えられます。

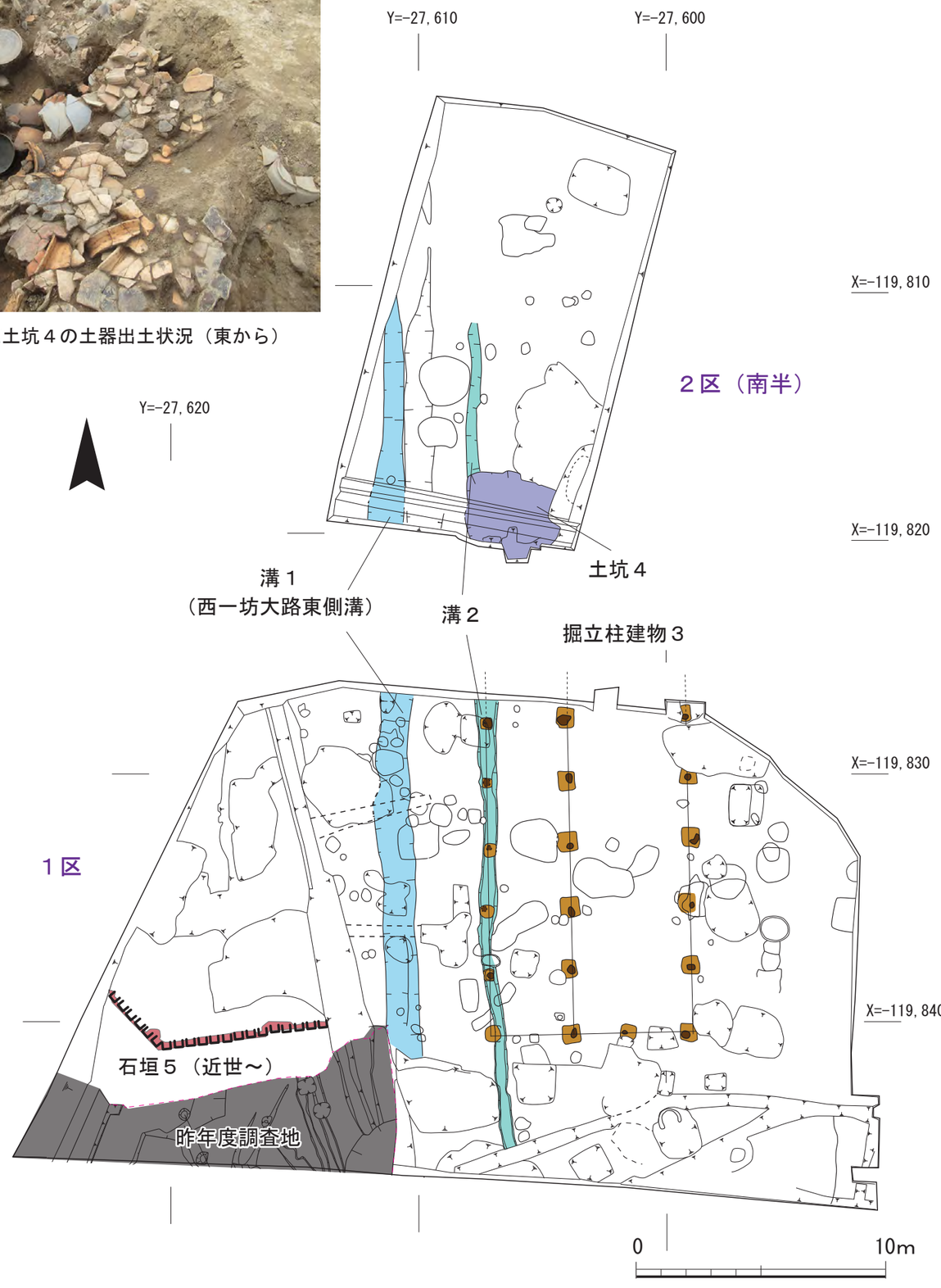


第１図　長岡京条坊と調査地点

第２図　周辺調査配置図（S=1/5,000）

（長岡京市教育委員会木村泰彦氏作成図に加筆）

２区土坑４の土器出土状況（東から）



第３図　１区・２区（南半部）平面図（1/200）